

宇治市の乳幼児教育・保育を語り合おう ー基本理念を、現場から問い直すー

京都教育大学
佐川早季子

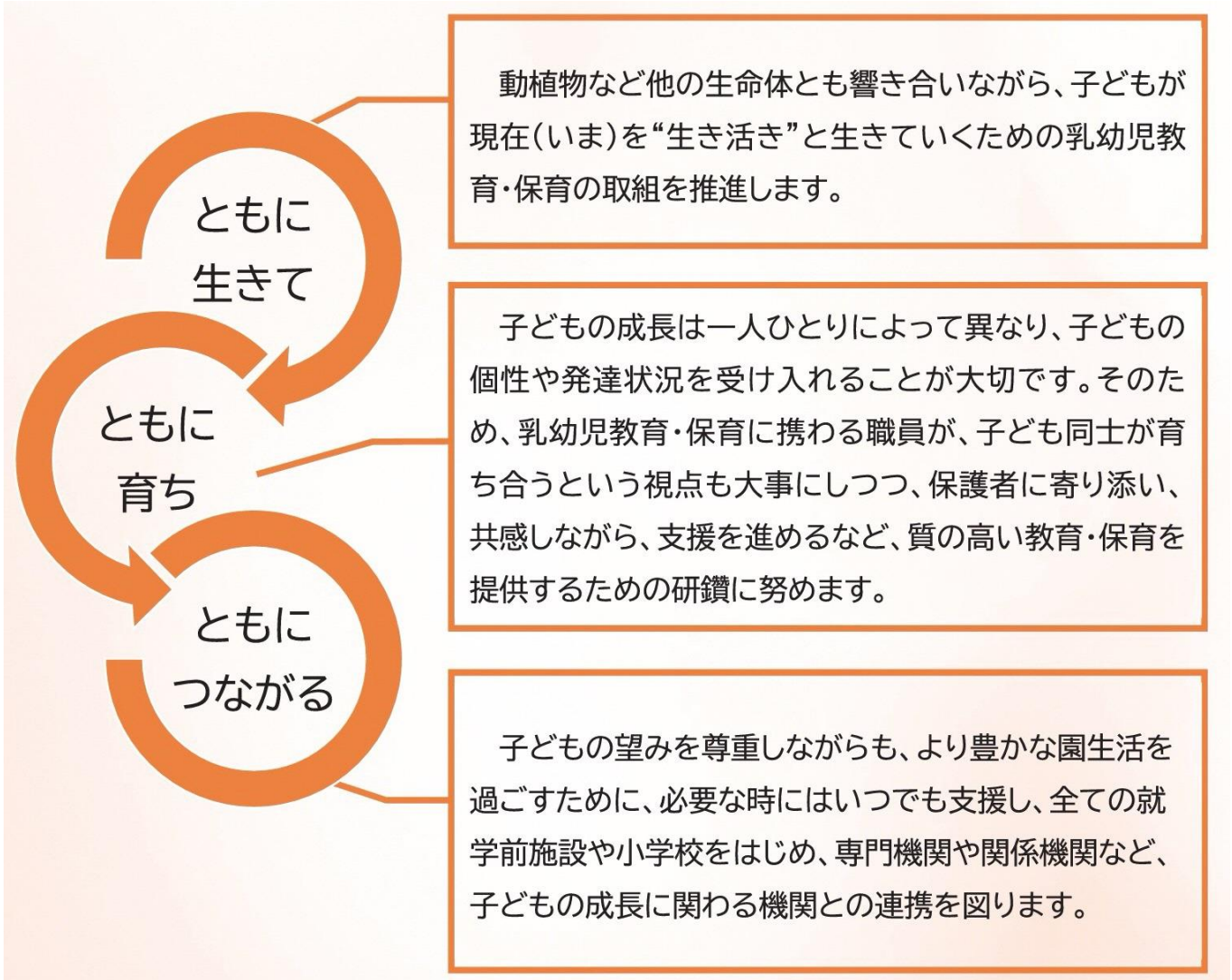
今日のゴール

- ・ 答えではなく、問いを持ち帰る
 - ・ 宇治市の乳幼児期の教育・保育の基本理念
「ともに生きて ともに育ち ともにつながる」
- ーこの言葉から、どんな保育の場面が思い浮かぶでしょうか？

宇治市の基本理念って、どんな意味があるの？

宇治市の乳幼児期の教育・保育の基本理念

育もう 未来のつぼみ
咲かせよう それぞれの花



「ともに生きる」とは

「ともに生きる」とは？

「ともに生きる」ために大切なものは…？

- 子ども、保護者、同僚は、それぞれが違う色やリズムをもつ
- わからなくても、排除せずに ともにいる
- そのために、わかろうとする姿勢＝「見取り」
- わからないものを前に 持ちこたえる胆力

その子と「ともに生きる」

4歳児のハルキくんが大型積み木で「飛行機」をつくっていましたが、イメージの食い違いから友達とぶつかります。話をしようとする保育者の前で、ハルキくんは部屋を出て、テラスに出ていき、戻ってきません。

「共に生きる」という言葉を通して、ハルキくんがテラスで過ごす時間をどう見るでしょうか。

私たちは子どもの時間をどう見取っているか

- 保育者にとって「動いていない時間」を、子どもにとって必要な時間として見ることができるか
- 気持ちを立て直す時間、気持ちを整えるための漂う時間
- 友達にとって、違うリズムと出会う、学びの時間
- 保育者の見取りで、子どもの「今」に呼応することができる

見取りとは

子どもの能力を評価することではなく
行動を操作することでもない

子どもの「今」をわかろうとし、呼応すること

わからないものを前に、
関わりを急がず、持ちこたえる
→「共にいる」ことの原点

発達・子育て支援は何を大切にするの？

子ども

さまざまな違いにふれ
新しい楽しさを感じながら
育ちゆく存在

ともに
育つ

親子の歴史を一步一步
踏みながら育ちゆく存在

保育者
(教育者)

保護者

保育不全感に圧倒されながら
小さな「楽しい」「やった」を
感じて育ちゆく存在



組織マネジメント
分散型・協働的リーダーシップ

多様性の包摂

誰も取り残さない

インクルーシブ
保育・教育

保育者も、保護者も「ともにつながる」ことが必要

➤ 子どもとのかかわりに悩んでいる先生

- ・私が担任でなければ、うまくいっているはず
- ・指導力不足と言われたくない
- ・あの子だけ特別なことをしていいの？

➤ 「気になる行動」をしてしまう子どもの保護者の苦しさ

- ・私の育て方の問題かもしれない、親失格だ
- ・私の育て方のせいにされたくない
- ・うちの子だけ特別なことをされるのは嫌

子どもの発達について「ともに考える人」へ

➤ 親として、逃げずに子どもと生きてきた「親子の歴史」がある

➤ 保育者にも、その子との歴史がある

・ 試行錯誤の中にも、ヒントがある

だから・・・

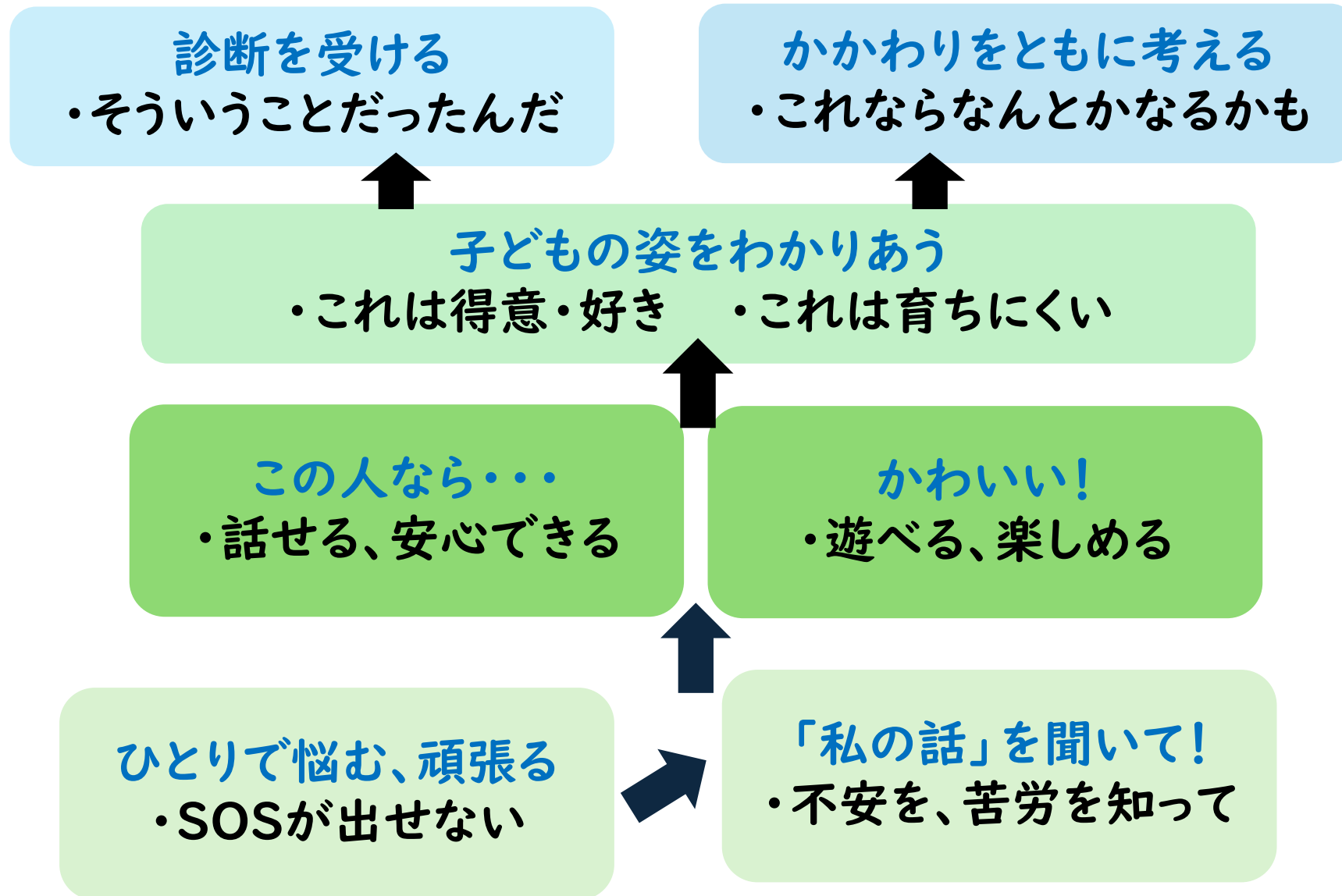
・ つながる → エ夫やヒントをあつめる



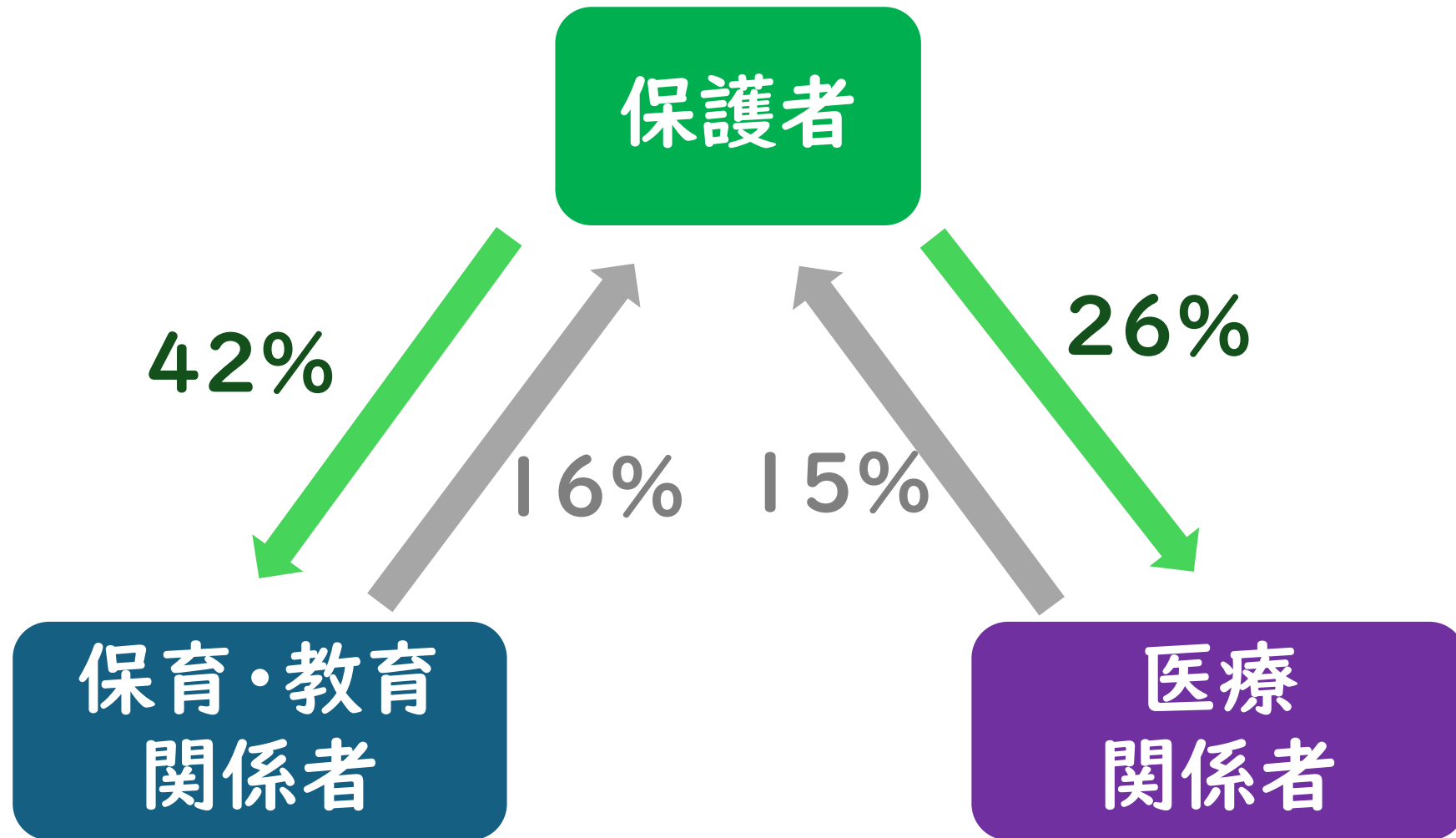
子どもの過ごしやすさ・学びやすさの実現

保護者の現状を理解する

- 保護者はわかってくれないと言いたくなるが・・
 - 何をわかってほしいと思っているのか？
→それは、今の保護者にとってどうなのか？
- その前に・・・
- 保護者のことを、どれだけわかろうとしているだろうか？
 - 保護者にまず伝えるべきことはなにか？

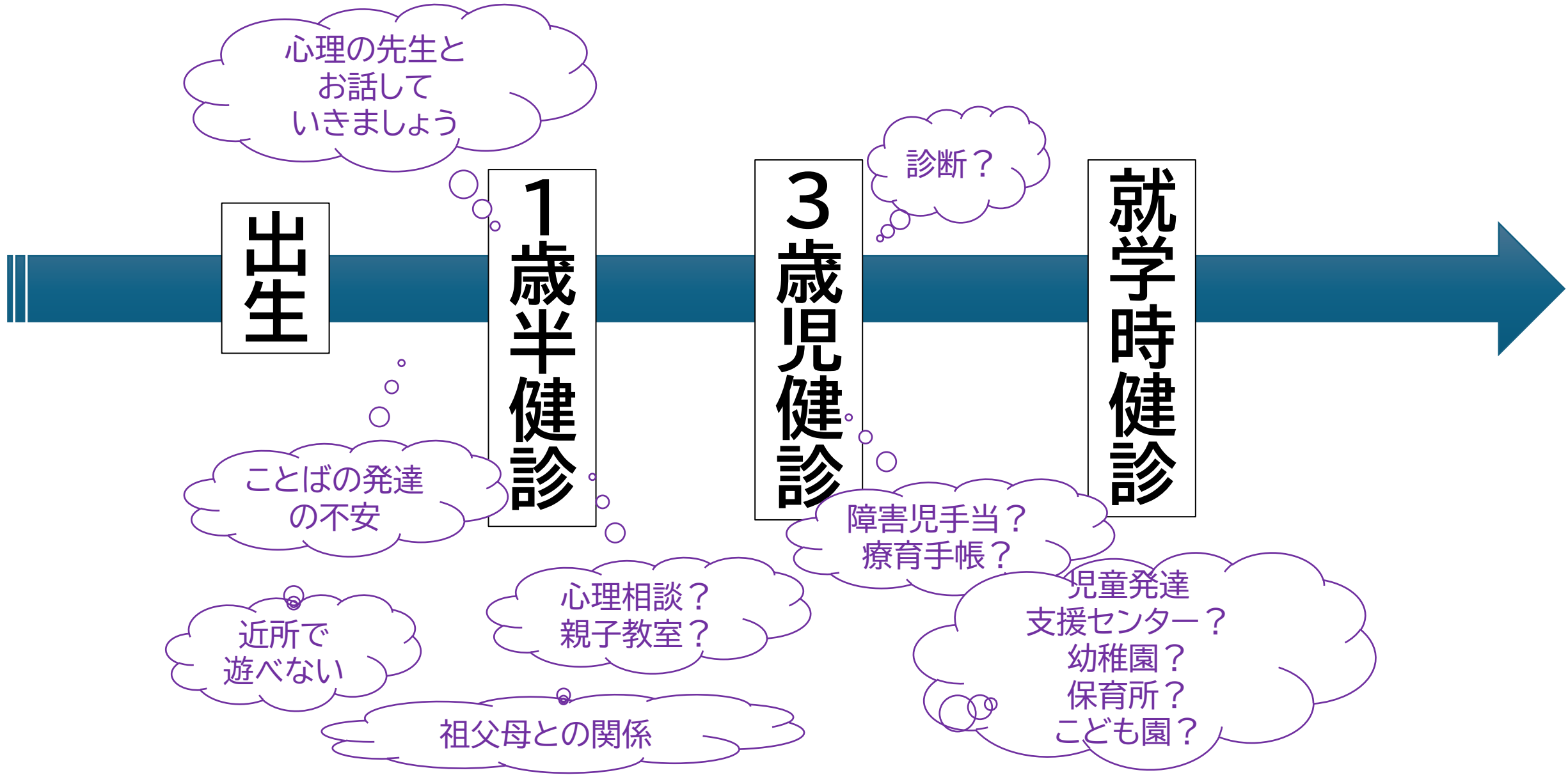


「連携がうまくいっていない」と感じている割合



それぞれの親子には 尊重すべき「親子の歴史」がある

久保山茂樹「保護者への支援と保護者との協働」
久保山茂樹・小田豊編著『障害児保育』光生館、
p.137



診断を受けるということ

●プラスの効果

- 育て方のせいではないことが、確認できる
- 同じ障害について情報が得られる
- 前向きになれる保護者もいる

●マイナスの効果

- 精神的ショックが大きい
- 保護者、家庭の危機
- 障害名で子どもを見るようになる

プラスとマイナスのバランス、タイミングの見きわめ
「ともにつながる」フォロー体制づくりが、とても重要！

障害の受容と言うけれど・・・

わが子に障害があることを認めるには長い時間が必要

➤ともに考える人がいる

- ・わが子を「かわいい」と思う人がいることが伝わる
- ・園の大切な子どもであることが伝わる
→ 試行錯誤だとしても、支援がなされている
- ・「あなたのせいではない」「今までよくがんばった」と認めてくれる人がいる

➤専門機関の利用は園での支援充実のため

- ・支援を充実させることが目的であることを伝える
- ・専門機関に同行したり、お手紙を出す

保幼こ小連携って交流を増やせばよいの？

保幼小連携は「交流」が目的ではありません。
交流は一つの方法です。

目指すのは**子どものワクワクを引き出すこと!!**



幼保小ともに主体的・対話的で深い学び、
保育・授業の改善につなげることです！

保幼小の**連携**の質を高める

- ・「主体的・対話的で深い学び」を軸とした授業・保育の改善
- ・「すべての子どもに学びの保障を」を実現するため
保幼小連携・接続は必須のもの

- ・ 連携：幼保小の大人同士の組織的協働関係

→ 連携の仕組みづくり

□ 実践を見合う・語り合う機会をそれぞれの年間計画に入れ込む

幼保小の**接続**の質を高める

- ・ 接続：保育・教育の内容及び方法的つながり

→ 接続の仕組みづくり

- つなげるための**共通の視点**をもち、すべての取り組みで意識する。
共通の視点とは、それぞれのカリキュラム、めざす子ども像、行事内容、保育・授業内容等、知り合い、つながるための進むべき方向
- 環境構成の工夫を知り合い、生かし合い、高めあう

保護者の認識にみる 連携接続の取り組みによる子どもの行

子どもの安心感・意欲に
つながっている！

視点	上位カテゴリー	カテゴリー	各記述数 (%)
学校・園に焦点のある視点	環境の違いへの気づき	生活空間としての学校の認識	18(8.5%)
		物理的環境の理解	3(1.4%)
子どもと学校・園に 焦点のある視点	小学校への期待	心理的障壁への除去	30(14.1%)
		未知の世界への興味	44(20.7%)
		小学生としての自覚	8(3.8%)
子どもと学校・園(仲間)の関 係性に焦点のある視点	仲間関係の構築	異年齢への親しみ	58(27.2%)
		仲間入り	18(8.5%)
		関係の拡大	7(3.3%)
子どもに焦点のある視点	成長の見通し	スキルの上達	7(3.3%)
		意欲の向上	16(7.5%)
		視点取得	4(1.9%)
		計	213(100%)

保護者の認識にみる 連携接続の取り組みによる保護者の行動

保護者の安心感に
つながっている！

視点	上位カテゴリー	カテゴリー	回答記述数 (%)
学校・園に焦点のある視点	小学校への関心	意義の認知	9(7.3%)
		小学校の特色の認知	31(25.2%)
保護者と学校・園に 焦点のある視点	移行期の理解	子どもの実態の認知	5(4.1%)
		事前準備の評価	15(12.2%)
		協力関係の認知	10(8.1%)
保護者と学校・園の関係性に 焦点のある視点	コミュニケーションの尊重	専門家への信頼	5(4.1%)
		移行の準備	5(4.1%)
保護者に焦点のある視点	子どもへの支援	情動の共有	8(6.5%)
		効果の限定	15(12.2%)
-	連携の意味づけ	きょうだい児の影響	20(16.3%)
		計	123(100%)

異質なものと出会うことで得られる経験の価値

- ・ 子どもにとっての同年齢同質学級の中では得られない経験の意味と価値

事例：交流活動で疲れる子どもの姿から

「子どもも大人も異質なものと出会う経験はただあこがれや楽しさ、おもしろいということだけではない。しんどくて疲れる、面倒、自分たちだけでやったほうがずっとよい、けれども相手のことを思って真剣に行った行為だからこそ、**同年齢同質学級の中では得られない経験の意味**がここにあるのではないか。子どもたちが真に民主的な市民となる育成を考えるなら、本来こうした**経験の価値**をこそ語るべきではないか」(秋田・第一日野グループ, 2013)

持続可能な形で、継続することから

- 幼小連携の原則 「互恵性」「**継続性**」「名づけ合う関係性」「物語性」(秋田, 2002)
- マイナスで考えたら何もできない。できるものを選んでいく。
- **無理のないところでわかりあえる機会**をみつける。
- 参加者それぞれの関わり方やペースの違いを尊重し、できるところから無理なく。

まずは対話できる場の構築 → 関係の構築
保幼小連携を「行事」→「文化」に

まずは近隣園校が集まる**対話**の場を。可能な範囲で具体的な実践を持ち寄って

園長・校長、教頭・主任、学年主任、担任同士…現状から もう一歩多層的に

一回の出会いが貴重で重要。可能な次を探り、継続へ⇒対話的關係をひらく挑戦

古賀(2024)「架け橋プログラムの全市展開とその充実に向けて」京都市管理職悉皆研修資料

実践を見て考えるときのキーワード

ある教育実践が成果をあげ、その実践を見るために、多くの見学者が訪れるようになった。さまざまな見学者がいたが、プログラムの具体面を事細かに尋ねて資料をコピーしていったグループは、見学の結果を自分たちの実践にはあまり生かせなかった。これに対して自分たちの実践に生かしたグループは、形をコピーするのではなく、この実践の「精神（スピリット）」を汲むことによって、自身の状況に適した独自の実践をつくることができていた（ショーン, 1988）

今日のゴール

- 答えではなく、**問い**を持ち帰る
- 宇治市の乳幼児期の教育・保育の基本理念
「ともに生きて ともに育ち ともにつながる」
- ーこの言葉から、どんな保育の場面が思い浮かぶでしょうか？
- ー自園で大切にしたい「**精神（スピリット）**」は？